



くまのピエール
Iwa no Ponga / Ritsun / 菱木 晃子

ピエールは、ステイヌの家で暮らす小さくまのぬいぐるみ。はじめて見た月を、硬貨と間違えて取りに行こうとしたり、雪玉のなかに閉じ込められてしまったり、バイクのタイヤを坂だと思ってひたすら登り続けたり……。勘違いから、いつもおかしなハプニングを巻き起こすピエール。これは、そんなおとぼけ屋のくまの、ゆかいな日々のお話です。

おにぎりに はいりたいやつ よっといで
岡田よしとか

おさらのうで、おにぎりたちが話しています。「ぼくら、ぐ、いれてもらってないねんなあ」「ぐ、ほしいな。みんなでさがしにいこか」——。おにぎりたちは具になってくれる食材を求め、旅に出ることにしました。読後、おにぎりが食べたくなる楽しい絵本。読者参加型の遊び心溢れる構成にも注目です。



みどりバアバ
ねじめ正一 / 下田 昌克

花屋のみどりバアバが作るコロケは、大きくておいしい。バアバは「毎日お花を手でさわって、お花の栄養をいっぱいもらっているからだよ」と、こうくんに手を見せてくれた。でも、やがて右手に力が入らなくなり、バアバはしんでしまう。こわくなって涙が出てきたけれど、花屋の栄養たっぷりのバアバの手をさわったこうくん。お葬式が終わった夜、みどりバアバのお店にいくと…。バアバと向き合う男の子の気持ちを丁寧に描く。



まじよばーのたまごやき
堀 直子 / 木村いこ

まじよばーは、病気で亡くなったぼくのお母さんのお母さん。優しくお母さんとは段違いで、ぼくとお父さんのアパートにしょっちゅうやってきては、ぼくの勉強のことや、たまった洗濯物について、がみがみいう。ある日、まじよばーは「ゆうたをひきとらせてもらいます。」とお父さんに言った。お父さんと離れたくないぼくは、自分なりに考え、自分でできることはちゃんとできるように、精一杯努力した。だけど、まじよばーは納得しない。そして、まじよばーと「たいけつ」することになり……。



はまでら4つのや図書館

2023.4月の新着本より



ウェリントンのおおきいおでかけ
スティーブ・スモール / 青山 南

今日はウェリントンのたんじょうび。もうすっかり大人になった気分です。ところが、たんじょうびプレゼントにももらったパパとおそろいのジャケットは、ウェリントンにはまだ大きすぎてしょんぼり…。そこで、サイズを直してもらいにパパとお出かけすることになりました。ひとつ大人になったお出かけは、どんなものになるのでしょうか？



ぱちぱち おめでとう
ひろゆた(新井洋行+中垣ゆたか)

「手をたたいて、大きな声でおめでとうって言ってね。せーの！ぱちぱちぱち…」ページをめくると、おめでとう！っていろいろなものが現れるよ。こどもといっしょに手を動かしながら楽しむ、誕生日のアクション絵本。ひろゆた(新井洋行+中垣ゆたか)の絵本第2弾、二人だからこそその楽しい世界が広がります。



のせのせ せーの！
斉藤 倫 / うきまる / くのまり

唱えてめくると、あら不思議！白い鳥がいます。そのとなりのページには、赤い実がたわわになった、大きな木。「のせのせせーの！」とページをめくると…すてきな羽になりました！真っ白なワンピースがかわいい花柄になったり、ビーチボールが牛の模様になったり…となりのページにあるものが、つぎつぎと絵にのっかっていきます。めくって、のせて、見つけて、楽しい、新感覚の絵本！(Amazonより)

よろしくパンダ広告社
間部 香代 / 三木 謙次

広告社って、なにをする会社か知ってる？商品のCMやポスターなどの広告を作る会社なんだ。なかでも広告の言葉は、みんなを元気にしたり、気持ちを結びつけたり。そんな魔法の力を持つ言葉と格闘する、ぼく、パンダ広告社の本田パンダです。



いつもの木曜日
青山 美智子 / 田中 達也

2021年、2022年本屋大賞2位受賞作家・青山美智子さんが贈る『木曜日にはココアを』に繋がる温かな物語。累計26万部を突破した『木曜日にはココアを』。その12編の物語に登場したワタル、朝美、えな、泰子、理沙、美佐子、優、ラルフ、シンディ、アツコ、メアリー、そしてマコ。これは彼、彼女たちがあの日に会おう前の物語。そんな前日譚を田中達也さんが作ったミニチュアとともに読む、絵本のような小説です。カップにココアが注がれるその瞬間を味わってください。



倒産続きの彼女 新川 帆立

倒産の危機に瀕する老舗のアパレル会社・ゴーラム商会を救うため、弁護士の美馬玉子は先輩の剣持麗子とともに「会社を倒産に導く女」と噂される経理課の女性の身辺調査を行うことになった。ブランド品に身を包み、身の丈に合わない生活をしている彼女は、会社の金を横領しているのではないか。ところが調査を進めるさなか、ゴーラム商会の「首切り部屋」と呼ばれる小部屋で本物の死体が発見され……。

まち 小野寺 史宜

「東京に出る。人を守れる人間になれ——」じいちゃん言葉に背中を押され、単身上京した僕、江藤瞬一。誰ひとり知り合いのいない街は、僕を受け入れてくれるのか？

両親を亡くし、尾瀬の荷運び・歩荷を営む祖父に育てられた江藤瞬一は、後を継ぎたいと相談した高三の春、意外にも「東京に出る」と諭された。よその世界を知れ。知って、人と交われ——。それから四年、瞬一は荒川沿いのアパートに暮らし、隣人と助け合い、バイト仲間と苦楽を共にしていた。そんなある日、祖父が突然東京にやってきて……。孤独な青年が強く優しく成長していく物語。

『日本製』 三浦 春馬

—日本全国47都道府県を訪れたことはありますか？—月刊誌『プラスアクト』の人気連載として、まだまだ知らないことだらけの<日本>を三浦春馬とともに見つめてきた『日本製』が、新たに撮り下ろしとロングインタビューも加え、408ページにも及ぶ超大作として堂々完成。書籍化にあたり三浦自ら日々を振り返り書き添えた直筆コメントや、この本を持って全国を巡りたくなるような構成は必見。約4年間の「日本製」旅における三浦春馬の成長も垣間見られるアルバムのような1冊としても楽しめる。ずっとそばに置いておきたい永久保存版！

こどもに聞かせる一日一話「母の友」特選童話集
福音館書店 母の友編集部

「こどもに聞かせる一日一話」は、福音館書店の雑誌「母の友」で長く続く人気企画です。短くておもしろい童話を30話一挙に掲載。気軽に読めて、子どもとおとなが一緒に楽しめる毎年好評をいただいています。この本には、21世紀以降、約20年分の「一日一話」から選んだ楽しいお話を中心に『ぐりとぐらのピクニック』や『だるまちゃんとうらしまちゃん』など、過去に「母の友」だけに掲載された、絵本の人気者たちの未単行本化作品を収録しています。

銀河鉄道の父 門井 慶喜

数多くの傑作を残した宮沢賢治。その父・政次郎との究極の親子愛を描いた第158回直木賞受賞作。

政次郎の長男・賢治は、適当な理由をつけては金の無心をするような困った息子。政次郎は厳格な父親であろうと努めるも、賢治のためなら、とつい甘やかしてしまう。やがて妹・トシの病気を機に、賢治は筆を執るも——。

虹にすわる 瀧羽 麻子

椅子作りの才能があるのに、地元で修理屋をしている徳井。椅子への情熱を持て余し、都会の大手工房を飛び出した魚住。タイプの違うふたりが、学生時代の約束のもと、小さな工房を始める。不器用な彼らは、友情でも恋でも仕事でもギクシャク……。海沿いの町の小さな椅子工房で夢の続きを見ることにした「こじらせ男子」の、胸アツ青春物語。

※掲載している書影、明記のない紹介文は版元ドットコム(https://www.hanmoto.com)より引用しています